

大学教育再生加速プログラム テーマⅢ（高大接続）

平成 30 年度事業

杏林大学「日英中トライリンガル育成のための高大接続」第三者評価報告書

【第三者評価委員会開催】

日 時：令和元年 9 月 28 日（土） 14 時～15 時 30 分

場 所：杏林大学井の頭キャンパス C 棟 5 階 応接室

評価委員：委員長 平方邦行氏（工学院大学附属中学校・高等学校 校長）

委員 鈴木 栄氏（東京女子大学 教授）

委員 藤井達也氏（埼玉県立和光国際高等学校 教諭）

杏林大学側出席者：

大瀧純一学長、ポール・スノードン国際交流センター長、稲垣大輔高大接続推進室長、
青柳貴徳井の頭事務部副部長、依田千春地域交流課長

【評価報告】

令和元年 9 月 28 日（土） 14 時より、大学教育再生加速プログラム（AP）テーマⅢ（高大接続）の第三者評価委員会が、井の頭キャンパス C 棟 5 階の応接室で行われました。

外部評価委員として、中学・高等学校の校長（高校教育全般）、大学教授（英語関係）、高校教諭（中国語関係）の 3 名の先生方をお招きし、本学からは、大瀧純一学長、ポール・スノードン国際交流センター長、稲垣大輔高大接続推進室長、青柳貴徳井の頭事務部副部長、依田千春地域交流課長が出席しました。

稲垣室長より、杏林 AP ラウンドテーブル、英語キャンプ、日英中トライリンガルキャンプ、ループリック、アドバンストプレイスメント等、平成 30 年度の本事業の実績について、説明と報告が行われました。

その後、三委員から本事業に関する評価について講評・意見等が述べられました。各委員からは「毎年度、杏林 AP ラウンドテーブルやアドバンストプレイスメント、日英中トライリンガルキャンプなど継続的に取り組み、その取り組みが広がっていることは評価できる」、「ループリックの入試への活用や、アドバンストプレイスメントの実施において夏期集中講座に切り替えるなど、高校生がより参加しやすい運営に切り替えた点は素晴らしい」など、おおむね高い評価をいただくことができました。その一方で、「これからの教育は一方的な教科書だけの授業ではなく、PBL など双方向授業を実践していく必要がある。大学や企業等、横の広がりを展開するなど知の結集をしていかななくてはいけない」、「英語キャンプ、日英中トライリンガルキャンプ、英語プレゼンテーションコンテストなどの興味深い取り組みに関連高校教員の見学を取り入れてみてはどうか」「アドバンストプレイスメントに関する単位互換協定を今後もより多くの大学の参加・拡充に向けてコアとなることを期待する」などといった意見が出されました。

このように外部評価委員と本学関係者と AP 事業推進のための建設的な意見交換ができ、約 90 分の委員会が終了しました。

本学の取り組みを高く評価していただく一方で、厳しいご意見もいただくことができ、今後もより一層の事業推進に向けて努力してまいります。

【添付資料】

- ・ 第三者評価書（H30 年度）平方
- ・ 第三者評価書（H30 年度）鈴木
- ・ 第三者評価書（H30 年度）藤井

【評価のための根拠資料】

- ・ 平成 30 年度大学改革推進等補助金（大学改革推進事業）調書
- ・ 日英中トライリンガル育成のための高大接続 事業報告書 平成 30 年度

以上

（注）アドバンストプレイズメントは、米国 The College Board の登録商標です。

第三者評価書

評価対象： 杏林大学「大学教育再生加速プログラム」（申請テーマⅢ：高大接続）
「日英中トライリンガル育成のための高大接続」
平成 30 年度事業実績

工学院大学附属中学校・高等学校
校長 平方邦行

【総 評】

「日英中トライリンガル育成のための高大接続」の組織が充実した。ラウンドテーブルという本組織の運営の情報を交換するだけではなく、システム活性化のための多角的な対話が活発に行われる組織として発展している。

何より、高大接続の教育内容の 4 つの柱である「AP」「ルーブリック」「日英中の学習イベント」「ライティング」が機能している。その証拠に、回数も重ねられたびに参加者も恒常的に増えている。

「AP」に関しては、大学の単位認定の実績が着実に積み重ねられている。「ルーブリック」も入試で実際に活用されるにいたっている。「イベント」の数は多く、参加者も増えている。「ライティング」は、サポート体制がしっかりしていて、生徒もライティング能力向上に手ごたえを感じている。

ただ一方で、データの成果のまとめが報告書には掲載されていないので、細かい分析ができない。実際にはアンケートや CEFR 基準のスコアなどが出ているはずであるから、今後は、代表的なデータは抽出して掲載されることを期待する。

【改善点】

- ① 本高大接続の肝は大学レベルの学びができる AP であるが、AP によってどんな人材を育成しようとしているのか、IB の「10 の学習者像」のような多面的な意味を確認できるグローバル人材の意味について明快にするときがきた。そして、それが IB で行われているように、ルーブリックにも反映しているか議論する機会がラウンドテーブルで行われる本質的な発展が望まれる。
- ② AP のレベルが大学の授業レベルであるということは、世界標準という意味もあるはずで

ある。海外大学の AP との比較調査をするか、思い切って海外大学との AP 連携も進めるのはどうだろうか。

- ③ 「ルーブリック」に関しては、「認知能力」と「コンピテンシー」の両方のベクトルに対応したものであるかどうか再確認する必要がある。グローバル人材は、基礎学力的な「認知能力」も必要であると同時に、コミュニケーション能力や共感能力、共に創り出すジェネレーターの新しいリーダーシップを求められているからである。
- ④ 「学習イベント」は、環境に関するもの、未来都市創造に関するもの、健康に関するもの、STEAM 関連のもの、ソーシャルアントレナーに関連するものをさらに増やす必要があるだろう。ニューヨークの国連本部で今月、60 以上の国の首脳らが気候変動対策の具体策を表明する「気候行動サミット」が行われたが、スウェーデンの環境活動家グレタ・トゥンベリさん（16）が若者を代表して演説した。「**未来の世代はあなたを見ている。私たちが裏切る道を選べば許さない**」と世界に訴えたわけであるが、この問いに同世代である生徒や学生はどう対応するのか、オーセンティックな学びにつながる AP のレベルであって欲しい。
- ⑤ 「ライティング」に関しては、その先に英語や中国語で「議論」できるところまで発展できることを期待する。キーノートスピーチ ― 議論 ― ライティング―声明プレゼンという一連の世界標準の流れの見通しが立つようなプログラムに再編集されることを期待する。
- ⑥ CEFR 基準で、B2 レベルには到達できることを期待する。SGH の学校はもともと B2 レベルに到ることを条件とされているのであるから、連携する各高校も足並みをそろえると、本高大接続プロジェクトのインパクトは相当なものになるはずである。
- ⑦ AP の講座は、大学の教師が行っているが、高校側の教師も研修を受け、日常の授業の中に組み込むシステムをつくる広がりを目指す。生徒のみならず教師力も向上することが、本高大接続プロジェクトの価値を高めるであろう。
- ⑧ AP や IB は、日本の学習指導要領のレベルを超えているため、世界標準というのを目標

すならば、高校のふだんの授業やカリキュラムのレベルの底上げが必要になる。そのため、本事業の AP を授業の中に盛り込むことによって、それを実行することができる。

- ⑨ IB のコアカリキュラムの 1 つである「TOK」のような学びがもう一つ設定される必要がある。4 つの柱は、まだ内的関連は果たされていない。たしかに、物理的にそれは難しい。しかし、ものの見方考え方の基礎としてジェネラルサイエンス（自然科学も社会科学もコンピュータ科学も含める）のプログラムが必要によって、本高大接続の内在的価値を高め、そのことが外部にコレクティブインパクトをもたらすエンジンになるだろう。

第三者評価書

評価対象： 杏林大学「大学教育再生加速プログラム」（申請テーマⅢ：高大接続）

「日英中トライリンガル育成のための高大接続」

平成 30 年度事業実績

評価者：東京女子大学

鈴木 栄

総評：

平成 24 年度に文部科学省補助事業のグローバル人材育成事業に採択されてから本取り組みは、「日英中トライリンガル育成のための高大接続」を目標とし、発展的な取り組みをおこなってきました。毎年の事業報告で、前年度の実施内容に修正および発展を加え、内容の充実が年ごとに増えています。「グローバル人材の育成」に関する事業においては、英語力強化に特化した内容のものが多く見られますが、貴学のトライリンガル育成の試みは、これから予想される多言語社会を見据えた画期的な取り組みであり、事業の理念が様々な教育分野で広がりを見せていることは、報告書の内容が証明しています。他の大学から見てもモデル事業であり学ぶことは多くあります。多くの大学が、貴学の取り組みを参考にして様々な取り組みを進めることを期待します。

大学の地域への貢献を目標とし、高大接続においては参加校の増加、各行事への参加者の増加は事業の拡充を示しています。高校との連携により、高校への出張講義、各種学習イベント、アドバンスト・プレイスメントを進め、その進展と成果についてラウンドテーブルで話し合うなど、実施と振り返りを繰り返していることも事業の充実につながっていると思います。高校と大学の話し合いの場を作ることは大変重要です。大学が高校や高校生の実態を知ること、高校が大学の学びについて知ること、高校生から大学生へと進む学習者のための繋がる教育を提供できると考えられます。

特色ある本事業の取り組みの一つに「ピアサポート」があります。「大学生（留学生を含む）による高校生へのサポート」および「大学生間での相互サポート」は、学習者間で話し合いをしながらプロジェクトを進め、共同発表をすることに繋がるアクティブ・ラーニングの一貫であると思います。特に、高校生へのサポートは、教える学生にとっても自らの学習を振り返るよい機会になります。また留学生がキャンプやプレゼンテーションコンテストなどの様々な活動に参加していることも、高校生にとって貴重な異文化体験になることでしょう。キャンプやコンテストなどの活動は、高校内での実施は容易ではありません。各都道府県教育委員会や研究部会を中心に活動をおこなっているところもありますが、その数が減少してきています。大学が、積極的に高校を対象にこうした活動を実践することは高校生および教員にとっても貴重な経験を提供する素晴らしい機会であると思います。

改善を重ねながら続けてこられて来た本事業の更なる発展と継続を祈願いたします。

改善すべき点：前年同様に、充実した取り組みをされていますので、改善すべき点は特にありません。平成 30 年度の実施項目について、感想、質問などについて以下に記します。

① アドバンスト・プレイスメントについて

高校生に授業を提供して単位を認定するアドバンスト・プレイスメントの実施は、高校生にとっては、高校時代に大学の授業を受けることができる画期的な取り組みであると思います。これまでに、授業時間が合わず、高校生の参加が難しかったことが課題であったと記憶していますが、夏季集中科目の開講をおこなうことで多くの高校生が参加したという結果が報告されており、進展が見られました。

海外の大学では、オンラインによる授業を多くおこなっていますが、可能であれば、今後はそのような選択肢も入れるとさらに多くの高校生が全国から参加できることでしょう。高校生にとって、大学のキャンパスに来ることもこのシステムの利点の一つではありますが、遠方の高校生の参加を促す意味では、オンラインのシステムも時代に合った方法でしょう。

また、高大連携の意見交換（p.19）に書かれていますが、「大学での学修に参加したことを高校側の単位として認めること」についての意見がありましたが、これについて、教育委員会の担当者をラウンドテーブルに招待するなどし、制度上のしくみから検討する機会を設けてもよいかもしれないと感じました。

② 教員研修について

平成 30 年の教員研修では、高校側の参加が少なかったのは日程もあるかもしれませんが。高校教員ですと平日の参加が難しい場合がありますが、連携協定校へは、学校長への依頼をおこない、教員の参加を依頼できるのではないのでしょうか。今回のテーマであれば、高校の進路指導部主任の参加が望まれるところであると思われますので、その旨明記して、学校から出張の形で参加してもらえるようになると高校側の理解も深まります。

教員研修の内容については、高校側に希望を取ることも一案かと思います。高校の教員からしますと、具体的に授業に役に立つ学習活動の事例、ループブックなどの評価方法の具体的な利用方法、自己啓発になる内容の講義（教養講座）などが参加のモチベーションへ繋がると考えられます。こうした研修を興味深いと感じた教員は、生徒の進路指導で貴学への進学について生徒と具体的な話合いができることでしょう。

また、研修内容として、テーマを決め、大学と高校からの参加者がテーマに沿って、それぞれの教育現場についての発表をすることで両者の理解が深まることも期待されます。学会や研究会でおこなわれているような口頭発表やポスター発表も準備に時間がかかりますが、成果はあると思います。

③ 各行事（イベント）の評価

様々なイベントを開催されており、事後アンケートなど取られていると思いますが、最近では、サーベイ・モンキーで簡単にアンケートが取れ集約できるので活用され、結果も公開された Web に載せられるとよいのではないかと思います。アンケートの内容によっては、行事の評価と参加者の意識の変化についても調査することが可能です。

また、参加者への参加証明書（Certificate）を発行することも参加へのモチベーションに繋がると思います。（英語関係のコンテストの場合、名前入りの英語の Certificate は、参加した高校生にとって役に立つものになります。スタンプ制度を導入し、高校生の複数回の参加を促すことも考えられます。

④ IELTS 対策講座

IELTS は、4 技能を測る試験として大学でも広く実施されています。高校生の時からこの試験についての知識を深めておくことは、大学生になり留学を考える際に役にたつと思います。生徒や学生が、自らの受験対策として本講座を受けることは役に立ちますが、教員にとってもどのように試験対策を指導するかについて知ることは指導の参考になります。参加人数を充実させるためにも、この講座に大学教員や高校教員を招待してはいかがでしょうか。

⑤ 様々な行事の見学について

英語キャンプ、トライリンガルキャンプ、プレゼンテーションコンテスト、同時通訳ブース見学会など興味深い取り組みに関して、関連高校教員の見学を取り入れてはいかがでしょうか。見学した内容を参考に、各学校で同じような行事の開催が期待できます。

第三者評価書

評価対象： 杏林大学「大学教育再生加速プログラム」（申請テーマⅢ：高大接続）

「日英中トライリンガル育成のための高大接続」

平成 30 年度事業実績

評価者：所属：埼玉県立和光国際高等学校

氏名：藤井 達也

総評：

平成 30 年度の本事業は主に以下の三点において評価されると思われる。

- ・継続的な取り組みの成果

まず「杏林 AP ラウンドテーブル」の継続的な開催があげられる。開催当初に比べ議論は非常に深まりを見せている。高校・大学双方の現実を踏まえた上での討議となっていることが伺える。大学入学共通テスト、いわゆる新テストの実施を前にした高校サイドの現場としての疑問・意見、また対応の難しさなどが率直に提出され、直に大学側に届き、それを大学側が真摯に耳を傾けているのが伝わってくる。それらをフィードバックして各プログラムのあり方を考えている。継続的に行ってきたからこそ生まれた議論の深まりである。

- ・各事業の拡充

大学内で外国語学部だけでなく総合政策学部・保健学部など学部横断的に事業が進められている。

COC 関連科目の高校生への開放など、高校生の参加により多くの機会を作った。

アドバンスト・プレイスメントの実施においては、春学期開講科目の受講の希望者がいなかったことからすぐに夏季集中講座の開講を実施した運営の対応力はすばらしい。高校生の実情に応じて、次年度に持ち越さず年度内に対応する即応性こそ、参加する高校生の増加につながるものである。

日英中トライリンガルキャンプにおいても、現在の中国社会の変化を題材に取ったテーマをもとにプレゼンテーションする活動は参加者の主体的な参加をより促すもので、成果物の発表もさらに向上したものになっていることが伺える。全体的に、参加機会の増加、それに伴う参加者の増加、プログラムの内容の充実、成果物や発表パフォーマンスなどのレベル向上が見られた。

こうした事業の量的・質的发展の中で、大学と高校、大学生と高校生の関係構築を元に、高校生と高校生、大学生と大学生あるいは大学生と留学生という結びつきを生み、その活動の中で新しい気づきや自己の見直しが生まれていることを感じた。さらに大学の教員と大学の教員、また高校の教員と高校の教員との関係を作っていく。縦のつながり、横のつながり、そして日本アドバンスト・プレイスメント推進協議会への参加など他機関とのつながりを作り、各事業の発展と共に有機的なつながりを構築してきたと言える。これらは次項のプラットフォームとしての役割にもつながるものである。

またライティングセンターの運営において「平成 31 年度に向けて早期より次年度ピアチャー

ターの募集、採用活動を行ったことで、次年度への引き継ぎがスムーズとなり、平成 30 年度活動を停滞させることなくそのまま維持させることが可能となる。」とある。こういった運営上の工夫・改善は一見小さなことのようにであるがとても大切なことと思われる。評価したい。

・本事業のプラットフォームとしての役割

「高校と大学をつなぐ FD/SD」の講演の中で触れられているとおり、教育改革は「高校教育と入試と大学教育の三位一体」で進められねばならないが、現実にはなかなか実現が難しい。本事業は、その「三位一体」のベースを作る可能性を大いに持っていると期待される。ループリックを取り入れた入試を実施し、高校とのラウンドテーブルを継続し、大学教育にもフィードバックしていくことでその役割を果たしていくことが期待される。

桜美林大学・共愛学園前橋国際大学・創価大学の 3 大学と「アドバンスト・プレイスメントに関する単位互換協定を締結したことは、今後より多くの大学の参加・拡充に向けてのコアとなることが期待される。実際目を向ける関係機関は増加している。

また、以上のことに加えて報告書には参加した高校生・大学生・関係者の感想が多く見られるようになり、各事業の開催されている様子・その波及的効果が理解しやすくなったことも指摘しておきたい。

改善すべき点：

改善すべき点は特にあげられません。述べてきたように高校側との話し合いとフィードバックを継続してきたことが本事業の発展につながっているのも、ぜひこれからも続けていただきたい。事業終了後も持続的発展していける道筋を具体的に示していただけるようならとても嬉しく思います。

波及効果として報告されている、中高生と大学生の高大連携ボランティア活動のような主体的「共同プロジェクト」が来年度に引き継がれることとなった事例などを援助していける仕組みづくりなども本事業の成果が持続していくことにつながるのではないかと思います。

向上を目指し真摯にご努力なされてきた皆様に敬意を表します。